

F・W・シェリング

『啓示の哲学』（20）

付録「積極的哲学の諸原理の別の演繹」

諸岡道比古

私たちの出発点は、〈あらゆる思惟に先立つもの〉つまり〈無條件的に実存するもの〉である¹⁾。課題は、このただあらかじめ与えられているもの、つまり無条件的な存在あるいは実存するものの中にある（というの、本来このもののみを私たちは初めに見るが、このものの何、Wasは私たちにはまだ隠されているからである）。私たちの課題は、あのただあらかじめ与えられているものの中に、本来のモナス Monas [Monas と Duas との対比で一と二を表す。『哲学的経験論の叙述』息子編集版全集二四三頁以下参照]、すなわち〈持続するもの〉、〈すべてのものを凌駕する原理〉を見出すことである。というのは、このものは、私たちが前思惟的存在 das unvordenkliche Seyn と名付けようとしている〈あらゆる思惟に先き立つ存在〉と共にすでに見出されるか否か、それゆえ、モナスは前思惟的存在と共にすでに見出されるか否か、がまさに問題だからである。しかしながら、おそらくこの存在は最

初存在、つまり本来的なモナスの最初の現象方法にすぎない。それゆえ、あの前思惟的存在は、それが変更されうるいかなる対立も、したがって、それが偶然的存在として振る舞いうるいかなる対立も端的に認めないかどうか、が問題である。私たちは、理念に到達するために、前思惟的存在から離れ、この存在から免れなければならない。このことがただ可能なのは、あの前思惟的存在が何かある弁証法によって自ら再び偶然的存在として——端的に、偶然的存在としてではなく、偶然的にのみ必然的存在であるものとして「——」示されうる時である。ところで、私たちは確かに、前思惟的に実存するものの中では、現実態、Actus があらゆるポテンツに先んじている、ということを主張した。必然的に実存するものは、／初めに可能的で、次いで現実的である、というのではなく、このものはすぐに現実的であり、存在と同時に始まる。それゆえ、前思惟的存在のあのいまだ認識されない何、つまりあ

のXは、明らかに *antecedenter*「先行している」あるいは *a priori*「ア・プリオリに。さらに以前に」〈存在するもの〉にすぎない。*a priori*「ア・プリオリに」に〈存在するもの〉であるまさにこのものが、後から、*post actum*「現実態の後で」(ここでは正しく本来的に語られている)、「存在しうるもの」であることを何もものも妨げはしない。私たちは、何ものも妨げない、と言うだけである。私たちは、このものが実際にそうである、とはまだ言わない。——このものは帰結によって初めて、*a posteriori*「ア・ポステリオリに。より後に」、証明されうる。*a priori*「ア・プリオリに」洞察されうるのは、先立つ方法で〈純粹に存在するもの〉であるまさにそのものが、後から〈存在しうるもの〉である、という可能性にすぎない。ポテンツが前思惟的存在に先行しなかったがゆえにまさに、ポテンツはこの〈前思惟的に実存するもの〉の現実態においてまた克服されえなかった。しかしそのことによって、まさにこの前思惟的に実存するものの中に、〈閉め出しえない偶然性〉が定立される。可能な対立にただ先立つものは、対立が可能なままである限り、この対立そのものに対して〈偶然的存在〉を持つすぎない。私が *ta* と *a* との間で選択し、*ta* と決定したならば、*a* は永久に閉め出される。私の「決定が」*ta* であることは、つねに必然的に、偶然的なものが考えられる盲目的なものではない。それは、欲せられたものであるがゆえに、偶然的なものではない。しかし、私が *ta* をただまに選択なしに定立したならば、*a* は確かに暫定的に閉め出されるが、永遠には閉め出されてはいない、あるいはむしろ、*a* はそもそも閉め出されていないし、*a* が後から現れ、有効になるということは、依然として可能なままである。

それゆえ、まさにそのようなものとしての純粹な現実態の中に、偶然的なものが存在する。〈単に *actu*「現実態で」必然的に実存するもの〉、しかも私たちは今までこのようなもののみを持っていただけであるが、このものは〈単に偶然的に必然的に実存するもの〉、あるいは、私たちがまさにそれゆえ名付けうるように、〈盲目的に実存するもの〉である。〈盲目的に実存するもの〉は〈単に偶然的に必然的に実存するもの〉であり、それゆえ、このものは〈存在しうるもの〉を *antecedens*「先行するもの」としてのみ閉め出すが、絶対的には閉め出さない。単にこのようなものとしての〈存在しうるもの〉は実存するいかなる権利も持たないであろう。しかし、〈単に *actu*「現実態で」、すなわち、単に偶然的に必然的なもの〉が存在する後に、〈単に可能なもの〉も自らの要求をしうるし、前思惟的存在は、ポテンツが現象することを初めて可能にする。まさにここから明らかとなることは、／〈後から現れる存在しうるもの〉が、しかしながら〈単に存在するもの〉との関係なしには存在しえない、ということ、したがって、何か別な実存するものではなくて、〈単に実存するもの〉であるものそのもののみが、あのものに対立する *potentia existendi*「存在する可能性」でもありうる、ということである。存在の前提だけとしてのポテンツは現象しえないのであるから、両者の間には統一が存在しなければならぬ。すなわち、〈単に実存するもの〉であるものそのものは *potentia existendi*「存在する可能性」でもなければならぬ。しかし、まさにそのことでもって、つまり私がこのものを語ることによって、言い換えれば、私が、〈単にあるいは無限に存在するもの〉であるものそのものは、無限な *potentia existendi*

「存在する可能性」あるいは「無限に存在しうるもの」でもある、
と云うことによって、すでに、「単に実存するもの」以上である何
か或るものが定立される。「実存するもの」の単なる *actus* 「現実
態」を凌駕するもの、単なる *actus* 「現実態」を凌駕しうるもの、
まさにそれゆえ、もはや「単に *actu* 「現実態で」必然的に実存する
もの」ではなく、「本質的に、すなわち、必然的に、必然的に実存する
もの」が定立される。この無限な *potentia existendi* 「存在する可
能性」は、「現実的に、実存するもの」つまり実存するものの *actus*
「現実態」から独立に「必然的に実存するもの」である *natura
necessaria* 「必然的本性」でありうる。つまり、その本性「自然」
あるいはその本質から見て、「そうでありうる」。

(1) この詳細が『啓示の哲学への序論』に直接つながる、ということとは、
前巻の二四八頁の註「第二二講二四八頁から二四九頁にかけての脚注
の二四九頁」で言及されている。編纂者。

それゆえ、この *natura necessaria* 「必然的本性」はまず最初に、
1) 前思惟的に存在するもの、そして次に 2) 他のものでありうるも
の、3) 両者の間を精神として自由に漂うもの、であろう。自由で
あるのは、この必然的本性が「しうること」に対しては存在とし
て、存在に対しては「しうること」として振る舞うであろうから
である。というのは、前思惟的存在をこの必然的本性は「しうる
こと」に対して自由にし、「しうること」を前思惟的存在に対して
自由にするからである。その結果、必然的本性は両者、つまり、
「純粹に存在するもの」と「この必然的本性が、存在しうるもの」に
よって、存在することができもの「[と]という両者」で、言い換え
れば必然的本性が両者でありうるし、またありえない。それその

340

もの、つまりこれら三つの契機 *Moment* の解消しえない統一とし
ての *natura necessaria* 「必然的本性」は、それゆえ、「絶対的に
自由な存在者 *Wesen*」であり、この存在者は、つまり 1) 「自らの
原存在 *Urseyn* (自らの前思惟的存在)」とは別のものである、この
存在者に示された存在「に」関して自由である。 *natura necessaria*
「必然的本性」は、1) この別の存在に「関して自由である。つまりこ
の別の存在を a) 欲しないこと」で自由である。というのは、この存
在から独立に、しかもこの存在よりも先に、この存在者は存在
(実存) しているからであるし、この存在者がこの存在を a *priori*
「ア・プリオリに」確信しているからである。しかしまた同様に、
この存在者は、この存在を b) 欲することも自由である。それは、
この存在者が「前思惟的に実存するもの」の *actus* 「現実態」にお
いて、この存在を持つことによってである。このことによって、
この存在者は再びあの別の存在を支配し、主でありうる。という
のは、この *actus* 「現実態」は、自らの代わりになる別の存在が現
象する——存在の空間を占める——に際し、なるほど *actus* 「現
実態」として破棄するが、しかしその根において破棄するためで
はないので、この *actus* 「現実態」が無限な *actus* 「現実態」のポ
テンツになるにすぎないであろうからである。この現実態はポテ
ンツになるだろうが、しかし、このポテンツは、抵抗しがたい力
でもって、克服することによって、すなわち「ポテンツから現れ
出たあの存在」を再びポテンツ化することによって、 *actus* 「現実
態」の自分を回復するであろう。この「ポテンツから現れ出た」存
在は今、現実態に対立し、しかもこの存在によって現実態はいわ
ば存在の場所から押しつけられ、否定されるであろう。 *natura*

necessaria「必然的本性」が〈存在しうるもの〉に対して自由であるのと同じように、*natura necessaria*「必然的本性」は、2)前思惟的存在そのものに対しても自由であり、それは前思惟的存在に固執することを強要されず、この存在から出て、この前思惟的存在そのものを再び必然的本性の運動の、つまりその生の単なる契機にすることができ。事実また、そうである、すなわち、この必然的本性がこの前思惟的存在を *actus*「現実態」から見て破棄するその時にも、そうである。この必然的本性は必然的本性のままである、すなわち、その本性から見て必然的なもののままである。必然的本性が〈存在しうるもの〉であり、そのものとして存在をあらかじめ持つているがゆえに、必然的本性はまさに初めて〈自由を携えた存在しうるもの——真に存在しうるもの〉である。〈真に存在しうるもの〉は、まずもって〈あらゆる先行する可能性から独立の存在〉としての自らの存在を信頼している。したがって、それは、後に続くいかなる存在によってもこの自らの存在において破棄されないことが確実であるものである。〈真に存在しうるもの〉はこの無限な存在を信頼しているがゆえに、このものは、別の存在を受け入れる、あるいは受け入れないことで自由であると考えている。というのは、〈現実的に実存するもの〉から独立に〈実存するもの〉のままであり、それゆえ、〈超実存するもの *das Ueberexistierende*〉(というのは、〈超実存するもの〉)ということで、まさに、実存するものの現実態から独立に実存するものであるものが理解されるからである)である〈真に存在しうるもの〉そのものにとつて、それゆえ、このものがこの別の存在を採用するか否か、その単なる意志によって別の存在を現実化する

かどうか、しかもそのことによって前思惟的存在を緊張させ否定するか否か、あるいは、〈単に可能なものとして示されたあの存在〉が直接またポテンツへ戻るか、あるいはむしろ、単なる可能性のままにして置かれるか否か、は完全にどうでもよいことである (*perinde est*「同じである」)。というのは、この可能性は、341 / もしも〈前思惟的存在の中に存在するもの〉がこの可能性を欲しないならば、無であり、この可能性が欲せられれば、或るものであるにすぎないからである。したがって、〈この可能性に相応する存在〉が存在するならば、この存在は、単にただ自らの意志すなわち神の意志によって存在するそのようなものとして存在する。(周知のように、あらゆる創造のこのような基礎付けは、このようなものとしての創造をおよそ否定しない人々すべてによって受け入れられる。しかし特に、このような基礎付けは、質料(単なるまだ形式のない素材)が神の単なる意志によって創造されたとする神学者たちによって示されるが、明らかに神学者たちはこの仮定と何かある理解しうる概念とを結びつける、ということではない)。別の存在の可能性は、原存在の中に含まれたものに対して現象する——存在が先立ち、可能性が存在の後に初めて来るが、この可能性は〈前思惟的存在の中に存在するもの〉に対して、この存在するものが存在している、というときから、それゆえ、永遠から現象する。ここにはこの普通な表現による説明がある。永遠であることは、何ものも、決して思想も先んじえないものである。私たちがたとえ以前に行こうと、すでに現に存在しているこの存在に対して、しばしば異論が唱えられるのを私は聞いている。つまり、あらゆる可能性に先んじるこのような現実性は

考えられない、と。もちろん、私たちが慣れている〈存在に先んじる思惟〉によつて「考えられない」。思惟は、思惟にとつて最も知る価値があるものとして、それゆえ、知において最も望ましいものとしても現象するものに、つまり現実的なものとしてのこの現象するものに到達するために、まさにこの存在を出発点にする。しかも、思惟は、この点から離れることにおいて初めて現実的思惟である。——運動すら本来まだ存在しない運動の *terminus a quo* 「・・・より始まる限界」が、しかしながら、また運動に属しているように、あの存在は出発において、つまりこの存在そのものから去ることにおいて、思惟の契機になる。——しかし、あの異論がたいそう重要であるならば、つまり、あらゆる可能性に先立つそのような現実性が決して表象されえないならば、このことはまたそうした事情にはないのである。というのは、このような存在がときおり表象されなければならないからである。例えば、産出、所行、行為、それらの可能性は可能性を現実化することを通して初めて理解される。あらかじめ存在している概念にしたがつて成就されるであろうものを／誰も原型とは名付けない。現実性を目の当たりにした時、初めてその可能性が認められるのが原型である。

その上、神自身が存在を考える以前に、神がその中に存在している存在は永遠である。神自身、永遠性から離脱する際に、自らの永遠性が初めて対象的になる。永遠性は、神学者たちの中で思弁的な者たちが消極的属性と名付けた神の属性に共に属している。永遠性を厳密に探究するならば、永遠性は一貫して、神からしかも自分以前にすなわち自らの神性以前に考えられるそのようなものであり、永遠性なしには、神は神でありえなかったであろう

うが、永遠性によつては、神は依然として神ではない。というのは、例えば、スピノザの実体も永遠であり、あらゆる前提なしに、根拠なしに *grundlos* 永遠であるが、しかしながら、その実体は神ではない。そうだからといって、神が永遠でなかったならば、神は神でありえなかったであろう。永遠性は神の神性の *conditio sine qua non* 「必須条件」である。この根拠のない永遠性の中には、もちろん、いかなる学問も、いかなる思惟も存在しないが、この永遠性は、カントが正しく言っているように、理性の深淵であるがゆえに『純粹理性批判』B版四〇九頁。・・・人間理性にとつての真の深淵・・・」、まさにそれゆえに、この永遠性は時点 *Moment* にすぎない、つまり直ぐさま離れる、それどころか、学問がそれから離れるために定立するだけの出発点にすぎない。永遠性から、と言うならば、永遠性はこのような *terminus a quo* 「・・・からの限界」にまさにされる。永遠性そのものの中には、まさにあの根拠のない存在以外の何ものも存在しない。しかしこの存在そのものは、それから離れるために、定立されるにすぎない。この存在が存在している、というときから、それゆえ、永遠から、他の存在のあの可能性が永遠なるものに現れる。このことによつて、永遠なるものは、本質の永遠性へ、つまり理念の永遠性へ到達するために、その盲目的永遠性から、つまり単に実存するものの永遠性からもぎ取られる。この可能性は永遠なるものそのものに〈あらかじめ存在しなかったもの〉、〈予期せぬもの〉として現象する。〈予見されなかったもの〉であれ、可能性は永遠なるものに *invisum* 「憎むべきもの」、別の意味で、〈ありがなくな

は、可能性は永遠なるものに、永遠なるものが自らの単なる意志によって現実性へと高まりうる存在を示すことによって、可能性は永遠なるもの一般に、永遠なるものが欲しうる何か或るもの——そもそも欲しうるもの、永遠なるものがあらかじめ持つていなかったもの、つまり、単に存在しうるものと単に非存在しうるもの「——」を与えるからである¹⁾。それゆえ、可能性が現象することによって、／＼単に前思维的に存在するもの²⁾が、ただこれ、つまり〈存在しうるもの〉以上の、いまだ存在しない〈存在の主であるもの〉に高まる。高まることによって、高まったものは同時に、このものがその主ではなかった〈自らの前思维的存在〉に対して自由である。というのは、高まったものは、このもの自身によって定立された存在ではなく、しかもこの高まったものは、すでに観念的に、*ideell*——少なくとも表象において——、つまり、すっかり自らの意志の中にあるあのポテンツが現象することによって、前思维的存在から分離されたからである。それゆえ、あの可能性が現象することは、前思维的存在における〈本来的に存在するもの〉であるものを初めて自分自身に与える。というのは、〈本来的に存在するもの〉にとつて可能的存在として示されるまさにこの存在の中に、〈本来的に存在するもの〉は同時に、自分自身を前思维的存在から現実的にも、実際に解放する手段を見て取るからである。〈本来的に存在するもの〉が〈前思维的存在に対立する存在〉の主であることによって、〈本来的に存在するもの〉は同時にまさにこの前思维的存在の主と分かる。詳しく言えば次の方法で分かる。あなたがたが、〈いまだ存在しないが、〔存在することが〕可能であり、しかも存在するとすれば、偶然的な

存在〉のあの主を考えるならば、それゆえ、あなたがたがこの偶然的存在を生じたものとして考えるならば、偶然的存在は、今初めて永遠な存在としても現象する〈生じたのではない、あらかじめ現存在していた、つまり原存在〉に出会うであろう。しかしさらに、この偶然的存在は生じえない、詳しく言えば、あらかじめ〈永遠な必然的存在〉以外何も存在していなかったまさにそこで、生じえない。——偶然的存在は、〈永遠な必然的存在〉に影響を及ぼすことなしには、生じえない。私たちが永遠な存在をAと名付けるならば、〈偶然的な、初めて生じたもの〉は、Aに等しくなものの、それゆえBであろう。それゆえ、前思维的な方法で、純粹なA以外何も存在しなかったところに、今、Aを閉め出そうと働きかけるBが存在している。私たちが純粹な *actus*「現実態」として、したがって純粹に外へ出て行くものとして、何ものによっても否定されたり阻止されたりしない、それゆえ何ものによっても自らの内へ逆戻りさせられたり追い返されたりしない、と知っていたこのもの「A」は今や対立物を持つ。このものは新たに生じた存在によって阻止され、いわば立場からずらされ、高みへ上げられ、例えば、生きている有機体のあらかじめ休んでいる部分が活動的になる場合のように、燃え立っている（燃え立つことは活動的になること、ポテンツから現れ出ること以外の何ものでもない）。次に、燃え立っている部分は、この部分の上にある諸部分を高め、その諸部分を *quo fuerunt*「存在していた」*eadem loco*「同じ場所には」止めておかないように、新たに生じた存在は／＼あらかじめ存在していたものに影響を及ぼす。この方法で、このあらかじめ運動していない存在の中に、何はさておき運動が現れる。

この存在は自らまた他の存在になる。この存在は自らの内に否定をすなわちポテンツを獲得する。そして、このことにより、この存在は自ら〈ある存在するもの *ein Seyendes*〉(というの)は、この存在は元を正せば存在するものというもの、*das Seyende*であったからである)になる、つまりこの存在は本質から見つ *actus purus* [「純粹現実態」]であることを止めないが、しかし、この存在は *actu* [「現実態から」]見て、もはやこの純粹現実態ではないが、今では本質から見ても、そうであるにすぎない。しかも本質がポテンツと等しいのであるから、それゆえ、この存在は今では *actus purus* [「純粹現実態」]の無限なポテンツにすぎず、この存在にとって、*actus purus* [「純粹現実態」]であることが、その本性「自然」によって課せられている。この存在は、これが以前にそうであった〈純然たる、ポテンツのない、それゆえ、同時に没我的な *selbstlos*、自身自身を想定しないし、自分自身を知らない存在〉ではもはやない。この存在は自らの内に否定すなわちポテンツを獲得したことによって、この存在は〈自分に対して存在するもの *ein für sich seyendes*〉になる。あらかじめこの存在は〈自分「のもと」から立ち去り、純粹に外へ出て行くもの〉であったが、今やこの存在は〈自分自身の中へ後退し、自分自身のポテンツに、すなわちまさに自分に対して存在するもの〉になった。この方法で私たちが見たのは、私たちがすでに〈偶然的で、単に可能的存在〉の主と見なした者、つまり、この者がこの偶然的存在を定立する、かあるいは定立しないか、ということの主であることによって、この者がまさにこのことによって自らの原存在の主にどの様になつたかをである。しかもこの原存在をこの者は、この者に示された存

在を受け入れることにより、純然たる存在から〈ある存在するもの〉へ、つまり *ex actu puro in potentiam* [「純粹現実態からポテンツへ」]定立するし、そうして、〈自らの必然的に実存すること〉そのものを〈偶然的に実存すること〉へと変更しうる(この否定された形態において、この必然的に実存することは偶然的に実存することである)。この者はこの原存在を破棄しうる。なぜなら、この者は自分から独立に、すなわち *actu* [「現実態から」]見て、実存するものであることなしに、それでもなお〈自らの本性から見て、必然的に実存するもの〉、*natura necessaria* [「必然的本性」]のままであるからである。

(1)前巻「第十三講」二六八頁参照。編纂者。

それゆえ、これは、硬直して何も始めることができない〈前思惟的に存在するもの〉から、積極的哲学が自分で立ち去る方法であろう。私は今この展開の歩みをもう一度、しかし別な方法で叙述することを試みる。というのは、私たちはここでは、必然的な思惟の領域ではなく、自由なすなわち本来思弁的な思惟の領域にいるからである。思弁という表現はあくまで積極的哲学に対して残しておかれるべきであろう。／例えば、初歩的な教育 *die Elementarbildung* は思弁的と名付けられないように、思弁的な教育は高次の教育である。思弁するということは、可能性を探すことを意味するが、その可能性を通してある目的が学問の中で達成されうる。仮説的結論において、大前提における仮定が結論における証明された真理であるように、これらの諸可能性は、明らかに直ちに、帰結において諸現実性と証明されなければならない

い諸可能性であるにすぎない。

この展開すべてをもって、積極的哲学は（それだけで）始まるが、この展開は、単なる普通の算術教師が無知である自分には横暴と思えるに違いない無限なるものの分析に関してほとんど思弁しないのと同様に、単に機械的に働かされた思惟がほとんど高まっていかない領域の中にあるし、しかも顕著に思弁的な種類のものである。それゆえ、高次の分析において様々な道を通って同一の結論へと到りうる様に、しかも結論がずっと以前に証明されている時にも、なおこの証明のより単純で、より明白で、より包括的な歩みを求めるように、ここでも、異なる叙述が可能であるし、許されている。

理性は、消極的哲学において自らの真の内容を現実的内容として所有しえない、ということを理解するがゆえに、消極的哲学の終わりに自らの外に置かれ「自らの能力を奪われ」、いわば打撃を与えられた理性は、あらゆる思惟以前の存在から出発することを決心する^①。しかし、理性は、この存在に対してすぐにまた立ち直るためにのみ、つまり、〈前思惟的に存在するもの〉は何か、という問いでもって、この存在に従うのである。というのは、理性はこの存在の中に、何はさておきしかも直接、〈前思惟的に実存するもの〉そのものを持つからである。それはちょうど、カントが言うように、誰もが防ぎえない結論「もしも或るものが実存するならば（表現の仮定的なものが示すのは、前提されたものがここでは〈存在しうると同様に存在しえないもの〉である、それゆえ、単に偶然的存在である、ということである）、何か或るもの（それゆえ、このものが何であるかは規定されないままである）が

また必然的方法で実存しなければならない」^②）においてのようである。初めに私たちは〈必然的に実存するもの〉について、まさに必然的に実存すること以外何も知らないし、／今何への問いが生じるとするならば、問われうる何が存在するにすぎない。つまり、〈前思惟的に存在するもの〉が *actu* 「現実態から」見て、〈必然的に実存するもの〉であるか、あるいはその本性から見て、〈必然的に実存するもの〉であるか（後者の代わりに、手短に、〈前思惟的に存在するもの〉が〈必然的に実存するもの〉そのものであるか）、どうかが存在するにすぎない。ところで、このことは、私たちが出発点にする *actu* 「現実態で」必然的に実存するもの」が、〈必然的に実存するもの〉そのものであるかどうかを、*a priori* 「ア・プリオリに」ではなく洞察することである。というのは、この *actu* 「現実態で」必然的に実存するもの」は自ら、私たちがこの実存するものに到達しうるだろういかなる *prae* 「プリウス。より前のもの」をもはや持つていないからである。私たちが想定し前提したように、〈*actu* 「現実態で」必然的に実存するもの」は絶対的な *prae* 「プリウス」であり、しかも私たちがさらにこの実存するものについて認識しうるものは、〈単に *a posteriori* 「ア・ポステリオリに」認識されたもの」でありうる。それゆえ、それに応じて、私たちはさらに、私たちが今問題になっている選言的命題について、つまり *actu* 「現実態で」必然的に実存するもの」が単にこのものであるか、あるいは〈必然的に実存するもの〉そのものであるかどうかについて、言い換えれば、私たちがこの命題について、そのように推論するために、仮説としての二つの選択肢を想定する、という仕事へ向かうであろう。それにとってそ

である、つまり、あの〈actu「現実態で」必然的に実存するもの〉の中に〈必然的に実存するもの〉そのものが存在するならば (necessario Existens「必然的に存在するもの」の中に natura necessaria「必然的本性」が存在するならば)、次のことが存在しなければならぬ。これが一般的形式における大前提であり、私たちはこの大前提だけを今何はさておき詳論しなければならぬ。その場合、小前提は、私たちがあの仮説の帰結として証明したものであるこれらすべてが現実的なものとして存在する、ということのみでありうるし、このことでもって、その場合また、あの仮説は仮説であることを止める。(このことは、私たちが〈前思维的に存在するもの〉〈自分で運動しないもの〉から、もちろん仮説という助けによってのみ、立ち去るがゆえに、それゆえ、展開の中に仮説という言葉が聞かれるがゆえに、それゆえ、ここではすべてが仮説に基づいている、という結論を導き出す惨めさを正すのである。それによれば、厳密な学問において、仮説的結論はそもそも禁止されていなければならないであろう。しかしながら、私たちは多くの場合に、この仮説的結論を必要とするし、この仮説的結論そのものを数学は、例えば、あらゆる間接的証明において、利用する)。この説明にしたがって、私は大前提の中の「もしも」の直接的な結論として次のものを提出する。——〈本性から見て、必然的に実存するもの〉にとって、〈単に actu「現実態で」必然的に実存すること〉は、どうでもよいこと、自分自身に關して偶然的事であることであるに違いない。というのは、〈本性から見て、必然的に実存するもの〉は自らの意欲をこの存在には向けていないからである／(この必然的に実存するものは、自ら意

欲することなしに、この〈前思维的に存在するもの〉である)。それゆえにまた、〈本性から見て、必然的に実存するもの〉はこの存在に対して所行の自由を持つし、〈この存在を越えて自由に留まったもの〉、それゆえまた、〈この存在を越えて存在しうるもの〉は当然〈別のもの〉でありうるもの、にすぎない——この必然的に実存するものがあの前思维的存在の中に存在しているのとは、別のものである「——」。〈natura sua「その本性からして」必然的に実存するもの〉は、〈単に actu「現実態で」必然的に実存すること〉を超越し、踏み越えるし、〈本性からして必然的に実存するもの〉はただ〈現実態で必然的に実存すること〉以上でなければならぬ。しかし、〈本性からして必然的に実存するもの〉はこの以上においてまた〈存在するもの〉ではありえないので、というのは、この〈必然的に実存するもの〉は、すでにあらかじめ、〈存在するもの〉であるから、この〈必然的に実存するもの〉は〈存在しうるもの〉、詳しく言えば、〈自分を、つまり自らの前思维的存在を越えた存在しうるもの〉でありうるであろう。この〈必然的に実存するもの〉は potentia actus「現実態のポテンツ」(現実態のポテンツ)ではないであろう。というのは、この〈必然的に実存するもの〉は a priori「ア・プリオリに」このもの (actus「現実態」)であり、それゆえ、 potentia potentiae「ポテンツのポテンツ」にすぎないのである。このものはおそらく十分明らかである。しかしながら、ところで〈無限に存在するもの〉の中で、本来的に存在するもの〈が〉〈必然的に実存するもの〉そのものであるとしても、このものはそれゆえまだ自分をかかるとして、それゆえ、〈根源的な actus「現実態」を越えた存在しうるもの〉と

して知らないのである。それゆえ、このことはなお特別に示されなければならぬ（つまり、このものが〈前思惟的な *actus*「現実態」を越えた存在しうるもの〉として自分を知る、ということ）。というのは、本来的に存在するものは、今まで〈自分においてしかも自分になる前に *an und vor sich* 存在するもの〉、すなわち〈自らの意欲や知なしに存在するもの〉、〈まさに外へ出て行き、自分自身に戻るもの〉であるからである。それゆえ、ここでは、いずれにせよ、なお補足的な思想が必要である。〈前思惟的に実存すること〉は、〈あらゆる概念に先立ち、それゆえ、概念によつては規定されないもの〉、〈その限りで、確かに必然的なものであるが、しかしながら、ただただ偶然的に必然的なもの〉、すなわち盲目的なものであるにすぎない。このようなものとして〈前思惟的に実存すること〉は、（*a potentia ad actum*「ポテンツから現実態への」移行によつて定立された）〈対立した存在〉を閉め出さなかった。さもなければ、対立した存在という概念が〈前思惟的に実存すること〉に先行しなければならなかったであろう。 *a potentia ad actum*「ポテンツから現実態への」移行によつて可能なこの存在は、確かにまったく、現実性へのいかなる要求も持っていない。もしも、前思惟的存在が存在しなかったならば、現実的なものとしてのこの可能的な存在はまったく問題にならなかつたであろう。ところが、この前思惟的存在が存在する、詳しく言えば、自ら盲目的に、すなわち、偶然的に存在する、このように存在するものに向かい合っている（単に偶然的な存在）も、／〈*actu*「現実態で」必然的に実存すること〉において本来的自我、本質であるものに対して、自己を示し、自己を叙述す

る一つの可能性として現象する権利を持っている。私はこの表現を用いる。なぜならば、この可能性自体、単なる現象であるからである。ただ、或るものは、可能性が現れるものに向かい合つて存在し、このものについて可能性は単に、このもの自身、〈存在しうるもの〉、〈自ら直接的に実存することを越えた存在しうるもの〉である、言い換えれば、このものはまさにそれゆえ、今初めて自らにとつて対象的になるこの存在から自由になりうるし、この実存することを凌駕しうる、と言う。というのは、今まで、存在そのものは主体の位置にあつたからである。〈存在しうるもの〉とこのものは自らを見なし、このものは〈存在しうるもの〉において存在の外に初めてある立脚点、*pou*「どこに」を持つ。この立脚点からこのものは自らの存在において運動しうるし、いわばこの存在を自らの立場から高めうる。それは、このものを絶対的に破壊するためではなく、すでに説明されたように、このものを消極的状态へ置くためである。

（1）前巻第八講、特に一六一頁以下を参照せよ。編纂者。

（2）前掲書「前巻第八講」一六六頁を見よ『純粹理性批判』B版六四三頁。編纂者。

私たちは〈*actu*「現実態で」必然的に実存するもの〉を〈必然的に実存するもの〉そのものであるものと区別する。このもの「後者」はまずもって単に理念であり、私たちが前思惟的存在の中に前提するものである。しかし、このものが前思惟的存在の中に存在するならば、（これがまさに私たちの仮説である）、このものは、対立したポテンツが現象することによつて、また自らの理念にすら高められねばならない。すなわち、このものは自分自身を、

〈もはや単に実存することからではなく、本性から見て必然的に実存するもの〉であるものと見なさねばならない。しかもこのもの「本性から見て必然的に実存するもの」がようやく現実的に神である。というのは、神は、以前説明されたように⁽¹⁾、〈単純に必然的なもの〉ではなく、神は〈必然的に必然的な存在者〉、*natura necessaria*「必然的本性」であり、神は、必然的本性であるために、実存することそのものを必要とはしない。神は、たとえ、必然的存在あるいは必然的に実存することが破棄されたとしても、〈必然的に存在するもの〉のままである。quod non per existentiam existit「存在によつては存在しないもの」、すなわちquod existit sed non per existentiam existit「存在するが、しかし存在によつては存在しないもの」——このものがようやく、私たちが神と名付けるものである。特にスピノザが逃れえない〈単にしかも actu「現実態で」必然的に存在するもの〉という概念から、〈natura sua「その本性からして」必然的に存在するもの〉という概念へ到達することが、ここでは重要である。弁証法的なものはここでは、〈actu「現実態で」必然的に実存するもの〉の中に偶然的なものを認識することにある。〈単に actu「現実態で」必然的に存在するもの〉の中に／〈必然的に存在するもの〉そのものが存在するならば、この必然的に存在するものにとつて、あの存在、あの actus「現実態」は、偶然的なものとして、したがって破棄しうるものとして現れねばならないが、直接的にしかも自分自身によつて破棄しうるものとしてではなく——このことは不可能である——、しかしおそらく〈後に続く存在〉によつて、したがって、〈可能性として姿を見せねばならない、自らの外存在〉

によつて、破棄しうるものとして現れねばならない。〈別の存在〉のポテンツが現象することによつて、〈ポテンツに先行する単に actu「現実態で」必然的に実存すること〉そのものが、〈偶然的な廃棄しうる、また非存在しうるもの〉として現象する。しかし、まさにそのことでもつて、〈実存するもの〉が、自らの実存することから離れ、そして〈実存することから独立な必然性〉において現象する。しかしながら、結局私たちは初めからこのもの、つまり〈その本性から見て必然的なもの〉のみを欲することができた。私たちは別のことをすることができなかったがゆえに、それゆえ、ただいわずば盲目的に、〈直接的にしかもまず最初に現れたもの〉、つまり〈actu「現実態で」必然的に存在するもの〉を私たちは定立したにすぎない。〈actu「現実態で」必然的に存在すること〉以外の何ものも定立しないのが、盲目的理性である。私たちが〈前思惟的に存在するもの〉と名付けたものは、今示されたように、本来 actus purus「純粹現実態」の actus「現実態」であるにすぎなかった。純粹現実態の現実態は actus「現実態」として偶然的にすぎず、不可避的なものにすぎなかったが、しかし、まさにそれゆえに、不可避的なものの前に actus purus「純粹現実態」そのものが見られなかった。ところが、actus purus「純粹現実態」の actus「現実態」が破棄されることにより、actus purus「純粹現実態」そのものは本質として後に残り、しかも本質として定立される。神の真の概念は、まさに、actus purus「純粹現実態」そのもの、すなわち、本質としての actus purus「純粹現実態」であること以外のいかなる概念でもない。

(1) 前巻「第八講」の一五九頁以下を参照。 編纂者。

私たちが *actus purus*「純粹現実態」そのものに対して、そこでまず最初に除去されるその *actus*「現実態」を先立たせることは、この展開において不可避であり、しかも、神の中に消極的諸属性を定立する人々によって、非難されることが最も少ないであろう。すなわち、これらの消極的属性において、神がいまだそのものとしても、その神性からも存在しない。もちろん、永遠なるもの、つまり自ら存在するもの (*quod a se est*「自分から存在しているもの」) のみが神でありうる。だから次のように表現されねばならないであろう(したがって、これらの属性を神性のア・プリオリな諸属性と名付けたいのかもしれない)。永遠なるもののみが神でありうるが、永遠なるものは必然的には神ではなく、永遠なるものは単に *a posteriori*「ア・ポステリオリに」神である。神の消極的諸属性から神の積極的諸属性へのいかなる必然的移行もない。

／予見、知恵、慈悲、そして〈それらによって神がようやく本来的に神であるものすべて〉が神の積極的属性に属している。しかも神学は今までこの移行を見出さなかった。消極的諸属性それ自身のみが汎神論へと導くが、積極的諸属性が初めて、私たちが真の神と名付けうるものの概念へと導く^[1]。〈前提された前思惟的な、すなわち(以前の説明によれば)偶然的で必然的な、その限りで盲目的存在〉なしに——、神はまったく神ではありえなかったであろう。というのは、神は〈超存在するもの *das Ueberseyende*〉でも、存在の主でも、それゆえ、そもそも主ではありえないであろうからである。私たちがそもそも神を欲するならば、私たちは神を主として欲しなければならない。——しかし、〈この *a priori*「ア・プリオリに」存在するもの〉の神性は、もちろん *a posteriori*

「ア・ポステリオリに」のみ証明される。それにもかかわらず、〈あらゆるものに先立つあの存在〉は、神の中に自ずから存在する、すなわち神の助力なしに存在する。神はあらかじめ——その上、自分自身に先立って——この存在を持っている。しかも、この存在なしには、神は神ではありえなかったであろう。この存在は、それ自身、すぐさま離れられる瞬間の思想にすぎない。この存在は、時間からではなく、事柄から見ての前提にすぎない。神があの前思惟的存在の中に存在するように、それゆえ、永遠から神は、必然的に実存することのこの *actus*「現実態」を必要としない、ということを知っている。つまり、神は、神が現実態なしでも、すなわち、彼がこの実存することを越えた〈必然的に実存するもの〉であり、しかも、まさにその点に、自らの神性があることを知っている。

(1)これに対して『神話の哲学』【第二巻】六一頁の註を比較せよ。編纂者。

それゆえ、永遠から神は、自らの前思惟的存在を破棄するために、もちろんこの存在を絶対的に破棄するのではないが、この前思惟的存在が神にとって、必然的過程を通して、自分によって定立された存在、つまり自由に意欲され、そうして初めて神の必然的存在になるように、この前思惟的存在を停止するために、自らを主と見なす。神は、このことをするために、自らを主と見なす、と私は言う。けれども、私たちが今問うことは、なぜ神がこのことを現実に行うべきだったのか、ということである。今まで、すべてのことが可能性の内部にのみ留まっていた。しかし、神は、自らの前思惟的存在を破棄し、この把握できない存在の代わりに

把握できる存在を定立するために、神に可能性として現象するものを——つまり神に可能性として現象するこのものを現実的にすることが、どうしてできるのであろうか。すぐ近くで立ち止まっている弁証法は、すでに言及されたもので満足し、次のように言うことで十分と見なしえたであろう。対立した存在のポテンツによって、神にとって〈自らの前思惟的に実存すること〉が *ex actu* 「現実態からその外へ」定立され、そして潜在化されるが、神は、この対立した存在のポテンツを受け入れる。それは、自ら定立したのではない存在を、自ら定立し意欲した存在へと変更し、自らの存在の直接的な、それゆえ盲目的肯定を、否定によって媒介された肯定へと変更するためである。けれども、神は誰に対してこのことをなすべきであったのだろうか。それは自分自身に対してであろうか。それは不可能である。というのは、神があらかじめ知っていることは、〈あの *actu* 「現実態で」必然的な存在〉がこのものとして実を示し、自らを回復するであろう、ということであるからである。それゆえ、自分自身のために、神は前思惟的存在の否定というあの緊張を、定立するには及ばないであろう。それどころか、私たちがもつとはつきりと表現したいならば、もしも神がこのことを単に自分自身のためになしえたとするならば、神はこのことを明らかにさなかったであろう、と私たちは言わねばならない。神自身にとっていかなる目的も持たない過程は、神にとって何の役に立つべきであったのだろうか。それゆえ、神は自分の外にある、*praeter se* 「自分の外にある」(「外」は *praeter* 「の外にある」と *extra* 「を越えて」に等しいが、ここでは二番目は問題ではない)、何か或るもののために、この過程への決心をしよう。

るにすぎない。神は自分の外にある何か或るもののために、〈自らの、*actu* 「現実態で」永遠な存在〉を停止する決心をしようにすぎない。——すでに神の外に存在していたであろう何か或るもののためではなく、この過程によって初めて現実的になるであろう何か或るもののために、しかもその可能性を神は、神に直接的に現れるポテンツによってまさに媒介されると見ている「——」。主として初めて、つまり、主のものと異なる存在を生み出すことにおいて初めて、神はまったく自己から離れている。この自己から離れることに、神にとって、自らの絶対的自由と同様に自らの絶対的淨福の本質がある。この主張は、消極的哲学のあの究極的概念を〈神について知るべき唯一のもの〉とする人々には奇異な感じを与えうるであろう。この究極的概念によれば、それゆえ、神は永遠な、すなわち永続的な主体＝客体にすぎないか、あるいは、アリストテレスが同じ思想を表現したように、*ho ton hapanta chronon heauton noon* 「すべての時間にわたって、自分自身を思惟しているもの」であるにすぎないであろう『形而上学』1075a10 参照。Loeb Classical Library, No.287, p.166ff.] 単なる概念規定と取られるならば、結局アリストテレスのこの表現では、神はその本質から見て〈永続的に自分のもとに存在するもの *das immerwährend bei=sich=Seyende*、自分自身を意識しているもの〉である、ということ以上に何も言われないであろう。しかもアリストテレスは明らかに、このことで、単に神の概念つまり神の本質を記述しようとした。／この意味でアリストテレスは〈あの永続的な自分のもとでの存在〉を自己のもとでの至福な、それどころか、最も至福な状態として記述するあらゆる努力をす

る。というのは、最高の満足は至る所で *actus* 「現実態」のうちに存在しているからである。例えば、目覚めていること、思惟すること、感覺することのうちにこそ、眠ること、思惟しないこと、感覺しないことのうち以上の喜びがある、とアリストテレスは語る⁽¹⁾。しかし最高の存在者は、私たちのうちには思惟の単なるポテンツがあるが、そのような単に思惟のポテンツではない。私たちのうちの思惟の単なるポテンツは、規則的に睡眠中に消え、しばしば多くの者たちにおいて変な時間に、それどころか、まったく不適當な時間に眠り込んでしまう。神はむしろ思惟の永続的な *actus* 「現実態」であり、しかも神は最も神的なもの以外何ものも思惟しえないので、神は中断することなしに〈自分自身を考えるもの〉でありうるにすぎない。述べておいたように、神の単なる概念すなわち神の単なる本性が問題であるならば、私たちはこのことを承認するかもしれない。しかし、まさにこの点に、また、現実的な神の能動性があるべきならば、私たちは〈この永続的に自分自身を思惟すること〉をむしろ最も苦しい状態と見なさなければならぬであろう。確かに、中断なしに自分自身のみを思惟し、それゆえ自分自身を想うこと以上に苦しいことは何もありえない。自分に固執する人間は本当に最も幸福な人間であるどころではなく、彼らにとって、自分の外の何か或るもの、つまり自分たちから真に独立なもの——客観的なもの——を精神的に生み出すことが、たいいてい最もできないように、人間は自分に固執することより、むしろ自己から去ることを必要とする。ヨハネス・ミュラー [Johannes Müller 1752-1809 ドイツの歴史家] は彼のある手紙の中で、私が主張している時、幸せであるにすぎない、

と書いている。この点で、精神的な非生産性で打ちのめされないどころではない誰もが、彼に賛成するであろう。しかし、主張することにおいて、人間は自分自身とではなく、自分の外の何か或るものに従事する。神の思想すべてが永続的に、神の外に存在するものの中に、つまり神の創造において存在するがゆえにまさに、神は、ピンダロス [Pindaros BC 522-442 ギリシアの合唱隊用抒情詩人] が名付けたように、偉大な至福な者である『オリンピック頌歌』一卷五二行。The *Olympian Odes*, I, 52, Loeb Classical Library, No. 56, P.8. 神ひとりが自分には関わらない。というのは、神は自らの存在を *a priori* 「ア・プリオリに」信頼し、確信しているからである。それゆえ、もちろん、神が〈神に現象する諸ポテンツ〉によつて自らを媒介したと見なす過程は、神の必然的存在を停止する過程であり、停止することによつて定立される、あるいは媒介される回復の過程である。けれども、あの破棄とこの回復との間には、全世界が横たわっている。／前思惟的存在は、創造を許容するために〈創造が生じるために、或るものが取り去られるがゆえに、空間は、あらゆる有限な存在のアプリオリな形式である〉、取り去られるにすぎない。世界は、神が必然的に実存することを停止した *actus* 「現実態」以外の何ものでもないが、停止された本質ではない。というのは、本質は、*actus* 「現実態」を破棄することによつて自分自身の中でのみ高められる〈破棄しえないもの〉であるからである。

(1) *Magna moralia*, II 『大道徳学』二卷 [1212b34 以下参照。Loeb Classical Library, No. 287, p. 678ff.]

今日つねに言われているように、神は自らを世界へ譲渡¹、²し、³しない *entäubern* 「外化⁴しはしない。 *entäubern* 外化はヘーゲリアンの言い回し⁵」。むしろ神は、神が創造者であることにより、自身つまり自らの神性へと自分を高め、まさにそのことでもって神は自らの神性になる。神は盲目的で前思惟的に実存することにおいて譲渡⁶「外化⁷」される。神は盲目的で前思惟的に実存することとを譲渡⁸「外化⁹」し、自分の外にこの実存すること（自分とは別のものとして）定立することによって、それと共に、神は自身自身に、自分の概念になるが、この概念の外で、神は存在していた——まさに前思惟的存在のうちに存在していた¹⁰「——」。ところが、同時に神は、単に自分を回復するためではなく、自分つまり神とは異なつた存在を自分の代わりに定立するために、（自らが必然的に実存すること）の *actus* 「現実態」を停止する。これに関してまず一般的に言えば、神は、永遠から神に現れ、神が欲すれば何か或るものであるにすぎず、神が欲しなければ何のものでないあの〈単に存在しうるもの〉の中に、つまりもはや単に考えられただけでない実在的原理としての〈この存在しうるもの〉¹¹、¹²、¹³、¹⁴、¹⁵、¹⁶、¹⁷、¹⁸、¹⁹、²⁰、²¹、²²、²³、²⁴、²⁵、²⁶、²⁷、²⁸、²⁹、³⁰、³¹、³²、³³、³⁴、³⁵、³⁶、³⁷、³⁸、³⁹、⁴⁰、⁴¹、⁴²、⁴³、⁴⁴、⁴⁵、⁴⁶、⁴⁷、⁴⁸、⁴⁹、⁵⁰、⁵¹、⁵²、⁵³、⁵⁴、⁵⁵、⁵⁶、⁵⁷、⁵⁸、⁵⁹、⁶⁰、⁶¹、⁶²、⁶³、⁶⁴、⁶⁵、⁶⁶、⁶⁷、⁶⁸、⁶⁹、⁷⁰、⁷¹、⁷²、⁷³、⁷⁴、⁷⁵、⁷⁶、⁷⁷、⁷⁸、⁷⁹、⁸⁰、⁸¹、⁸²、⁸³、⁸⁴、⁸⁵、⁸⁶、⁸⁷、⁸⁸、⁸⁹、⁹⁰、⁹¹、⁹²、⁹³、⁹⁴、⁹⁵、⁹⁶、⁹⁷、⁹⁸、⁹⁹、¹⁰⁰、¹⁰¹、¹⁰²、¹⁰³、¹⁰⁴、¹⁰⁵、¹⁰⁶、¹⁰⁷、¹⁰⁸、¹⁰⁹、¹¹⁰、¹¹¹、¹¹²、¹¹³、¹¹⁴、¹¹⁵、¹¹⁶、¹¹⁷、¹¹⁸、¹¹⁹、¹²⁰、¹²¹、¹²²、¹²³、¹²⁴、¹²⁵、¹²⁶、¹²⁷、¹²⁸、¹²⁹、¹³⁰、¹³¹、¹³²、¹³³、¹³⁴、¹³⁵、¹³⁶、¹³⁷、¹³⁸、¹³⁹、¹⁴⁰、¹⁴¹、¹⁴²、¹⁴³、¹⁴⁴、¹⁴⁵、¹⁴⁶、¹⁴⁷、¹⁴⁸、¹⁴⁹、¹⁵⁰、¹⁵¹、¹⁵²、¹⁵³、¹⁵⁴、¹⁵⁵、¹⁵⁶、¹⁵⁷、¹⁵⁸、¹⁵⁹、¹⁶⁰、¹⁶¹、¹⁶²、¹⁶³、¹⁶⁴、¹⁶⁵、¹⁶⁶、¹⁶⁷、¹⁶⁸、¹⁶⁹、¹⁷⁰、¹⁷¹、¹⁷²、¹⁷³、¹⁷⁴、¹⁷⁵、¹⁷⁶、¹⁷⁷、¹⁷⁸、¹⁷⁹、¹⁸⁰、¹⁸¹、¹⁸²、¹⁸³、¹⁸⁴、¹⁸⁵、¹⁸⁶、¹⁸⁷、¹⁸⁸、¹⁸⁹、¹⁹⁰、¹⁹¹、¹⁹²、¹⁹³、¹⁹⁴、¹⁹⁵、¹⁹⁶、¹⁹⁷、¹⁹⁸、¹⁹⁹、²⁰⁰、²⁰¹、²⁰²、²⁰³、²⁰⁴、²⁰⁵、²⁰⁶、²⁰⁷、²⁰⁸、²⁰⁹、²¹⁰、²¹¹、²¹²、²¹³、²¹⁴、²¹⁵、²¹⁶、²¹⁷、²¹⁸、²¹⁹、²²⁰、²²¹、²²²、²²³、²²⁴、²²⁵、²²⁶、²²⁷、²²⁸、²²⁹、²³⁰、²³¹、²³²、²³³、²³⁴、²³⁵、²³⁶、²³⁷、²³⁸、²³⁹、²⁴⁰、²⁴¹、²⁴²、²⁴³、²⁴⁴、²⁴⁵、²⁴⁶、²⁴⁷、²⁴⁸、²⁴⁹、²⁵⁰、²⁵¹、²⁵²、²⁵³、²⁵⁴、²⁵⁵、²⁵⁶、²⁵⁷、²⁵⁸、²⁵⁹、²⁶⁰、²⁶¹、²⁶²、²⁶³、²⁶⁴、²⁶⁵、²⁶⁶、²⁶⁷、²⁶⁸、²⁶⁹、²⁷⁰、²⁷¹、²⁷²、²⁷³、²⁷⁴、²⁷⁵、²⁷⁶、²⁷⁷、²⁷⁸、²⁷⁹、²⁸⁰、²⁸¹、²⁸²、²⁸³、²⁸⁴、²⁸⁵、²⁸⁶、²⁸⁷、²⁸⁸、²⁸⁹、²⁹⁰、²⁹¹、²⁹²、²⁹³、²⁹⁴、²⁹⁵、²⁹⁶、²⁹⁷、²⁹⁸、²⁹⁹、³⁰⁰、³⁰¹、³⁰²、³⁰³、³⁰⁴、³⁰⁵、³⁰⁶、³⁰⁷、³⁰⁸、³⁰⁹、³¹⁰、³¹¹、³¹²、³¹³、³¹⁴、³¹⁵、³¹⁶、³¹⁷、³¹⁸、³¹⁹、³²⁰、³²¹、³²²、³²³、³²⁴、³²⁵、³²⁶、³²⁷、³²⁸、³²⁹、³³⁰、³³¹、³³²、³³³、³³⁴、³³⁵、³³⁶、³³⁷、³³⁸、³³⁹、³⁴⁰、³⁴¹、³⁴²、³⁴³、³⁴⁴、³⁴⁵、³⁴⁶、³⁴⁷、³⁴⁸、³⁴⁹、³⁵⁰、³⁵¹、³⁵²、³⁵³、³⁵⁴、³⁵⁵、³⁵⁶、³⁵⁷、³⁵⁸、³⁵⁹、³⁶⁰、³⁶¹、³⁶²、³⁶³、³⁶⁴、³⁶⁵、³⁶⁶、³⁶⁷、³⁶⁸、³⁶⁹、³⁷⁰、³⁷¹、³⁷²、³⁷³、³⁷⁴、³⁷⁵、³⁷⁶、³⁷⁷、³⁷⁸、³⁷⁹、³⁸⁰、³⁸¹、³⁸²、³⁸³、³⁸⁴、³⁸⁵、³⁸⁶、³⁸⁷、³⁸⁸、³⁸⁹、³⁹⁰、³⁹¹、³⁹²、³⁹³、³⁹⁴、³⁹⁵、³⁹⁶、³⁹⁷、³⁹⁸、³⁹⁹、⁴⁰⁰、⁴⁰¹、⁴⁰²、⁴⁰³、⁴⁰⁴、⁴⁰⁵、⁴⁰⁶、⁴⁰⁷、⁴⁰⁸、⁴⁰⁹、⁴¹⁰、⁴¹¹、⁴¹²、⁴¹³、⁴¹⁴、⁴¹⁵、⁴¹⁶、⁴¹⁷、⁴¹⁸、⁴¹⁹、⁴²⁰、⁴²¹、⁴²²、⁴²³、⁴²⁴、⁴²⁵、⁴²⁶、⁴²⁷、⁴²⁸、⁴²⁹、⁴³⁰、⁴³¹、⁴³²、⁴³³、⁴³⁴、⁴³⁵、⁴³⁶、⁴³⁷、⁴³⁸、⁴³⁹、⁴⁴⁰、⁴⁴¹、⁴⁴²、⁴⁴³、⁴⁴⁴、⁴⁴⁵、⁴⁴⁶、⁴⁴⁷、⁴⁴⁸、⁴⁴⁹、⁴⁵⁰、⁴⁵¹、⁴⁵²、⁴⁵³、⁴⁵⁴、⁴⁵⁵、⁴⁵⁶、⁴⁵⁷、⁴⁵⁸、⁴⁵⁹、⁴⁶⁰、⁴⁶¹、⁴⁶²、⁴⁶³、⁴⁶⁴、⁴⁶⁵、⁴⁶⁶、⁴⁶⁷、⁴⁶⁸、⁴⁶⁹、⁴⁷⁰、⁴⁷¹、⁴⁷²、⁴⁷³、⁴⁷⁴、⁴⁷⁵、⁴⁷⁶、⁴⁷⁷、⁴⁷⁸、⁴⁷⁹、⁴⁸⁰、⁴⁸¹、⁴⁸²、⁴⁸³、⁴⁸⁴、⁴⁸⁵、⁴⁸⁶、⁴⁸⁷、⁴⁸⁸、⁴⁸⁹、⁴⁹⁰、⁴⁹¹、⁴⁹²、⁴⁹³、⁴⁹⁴、⁴⁹⁵、⁴⁹⁶、⁴⁹⁷、⁴⁹⁸、⁴⁹⁹、⁵⁰⁰、⁵⁰¹、⁵⁰²、⁵⁰³、⁵⁰⁴、⁵⁰⁵、⁵⁰⁶、⁵⁰⁷、⁵⁰⁸、⁵⁰⁹、⁵¹⁰、⁵¹¹、⁵¹²、⁵¹³、⁵¹⁴、⁵¹⁵、⁵¹⁶、⁵¹⁷、⁵¹⁸、⁵¹⁹、⁵²⁰、⁵²¹、⁵²²、⁵²³、⁵²⁴、⁵²⁵、⁵²⁶、⁵²⁷、⁵²⁸、⁵²⁹、⁵³⁰、⁵³¹、⁵³²、⁵³³、⁵³⁴、⁵³⁵、⁵³⁶、⁵³⁷、⁵³⁸、⁵³⁹、⁵⁴⁰、⁵⁴¹、⁵⁴²、⁵⁴³、⁵⁴⁴、⁵⁴⁵、⁵⁴⁶、⁵⁴⁷、⁵⁴⁸、⁵⁴⁹、⁵⁵⁰、⁵⁵¹、⁵⁵²、⁵⁵³、⁵⁵⁴、⁵⁵⁵、⁵⁵⁶、⁵⁵⁷、⁵⁵⁸、⁵⁵⁹、⁵⁶⁰、⁵⁶¹、⁵⁶²、⁵⁶³、⁵⁶⁴、⁵⁶⁵、⁵⁶⁶、⁵⁶⁷、⁵⁶⁸、⁵⁶⁹、⁵⁷⁰、⁵⁷¹、⁵⁷²、⁵⁷³、⁵⁷⁴、⁵⁷⁵、⁵⁷⁶、⁵⁷⁷、⁵⁷⁸、⁵⁷⁹、⁵⁸⁰、⁵⁸¹、⁵⁸²、⁵⁸³、⁵⁸⁴、⁵⁸⁵、⁵⁸⁶、⁵⁸⁷、⁵⁸⁸、⁵⁸⁹、⁵⁹⁰、⁵⁹¹、⁵⁹²、⁵⁹³、⁵⁹⁴、⁵⁹⁵、⁵⁹⁶、⁵⁹⁷、⁵⁹⁸、⁵⁹⁹、⁶⁰⁰、⁶⁰¹、⁶⁰²、⁶⁰³、⁶⁰⁴、⁶⁰⁵、⁶⁰⁶、⁶⁰⁷、⁶⁰⁸、⁶⁰⁹、⁶¹⁰、⁶¹¹、⁶¹²、⁶¹³、⁶¹⁴、⁶¹⁵、⁶¹⁶、⁶¹⁷、⁶¹⁸、⁶¹⁹、⁶²⁰、⁶²¹、⁶²²、⁶²³、⁶²⁴、⁶²⁵、⁶²⁶、⁶²⁷、⁶²⁸、⁶²⁹、⁶³⁰、⁶³¹、⁶³²、⁶³³、⁶³⁴、⁶³⁵、⁶³⁶、⁶³⁷、⁶³⁸、⁶³⁹、⁶⁴⁰、⁶⁴¹、⁶⁴²、⁶⁴³、⁶⁴⁴、⁶⁴⁵、⁶⁴⁶、⁶⁴⁷、⁶⁴⁸、⁶⁴⁹、⁶⁵⁰、⁶⁵¹、⁶⁵²、⁶⁵³、⁶⁵⁴、⁶⁵⁵、⁶⁵⁶、⁶⁵⁷、⁶⁵⁸、⁶⁵⁹、⁶⁶⁰、⁶⁶¹、⁶⁶²、⁶⁶³、⁶⁶⁴、⁶⁶⁵、⁶⁶⁶、⁶⁶⁷、⁶⁶⁸、⁶⁶⁹、⁶⁷⁰、⁶⁷¹、⁶⁷²、⁶⁷³、⁶⁷⁴、⁶⁷⁵、⁶⁷⁶、⁶⁷⁷、⁶⁷⁸、⁶⁷⁹、⁶⁸⁰、⁶⁸¹、⁶⁸²、⁶⁸³、⁶⁸⁴、⁶⁸⁵、⁶⁸⁶、⁶⁸⁷、⁶⁸⁸、⁶⁸⁹、⁶⁹⁰、⁶⁹¹、⁶⁹²、⁶⁹³、⁶⁹⁴、⁶⁹⁵、⁶⁹⁶、⁶⁹⁷、⁶⁹⁸、⁶⁹⁹、⁷⁰⁰、⁷⁰¹、⁷⁰²、⁷⁰³、⁷⁰⁴、⁷⁰⁵、⁷⁰⁶、⁷⁰⁷、⁷⁰⁸、⁷⁰⁹、⁷¹⁰、⁷¹¹、⁷¹²、⁷¹³、⁷¹⁴、⁷¹⁵、⁷¹⁶、⁷¹⁷、⁷¹⁸、⁷¹⁹、⁷²⁰、⁷²¹、⁷²²、⁷²³、⁷²⁴、⁷²⁵、⁷²⁶、⁷²⁷、⁷²⁸、⁷²⁹、⁷³⁰、⁷³¹、⁷³²、⁷³³、⁷³⁴、⁷³⁵、⁷³⁶、⁷³⁷、⁷³⁸、⁷³⁹、⁷⁴⁰、⁷⁴¹、⁷⁴²、⁷⁴³、⁷⁴⁴、⁷⁴⁵、⁷⁴⁶、⁷⁴⁷、⁷⁴⁸、⁷⁴⁹、⁷⁵⁰、⁷⁵¹、⁷⁵²、⁷⁵³、⁷⁵⁴、⁷⁵⁵、⁷⁵⁶、⁷⁵⁷、⁷⁵⁸、⁷⁵⁹、⁷⁶⁰、⁷⁶¹、⁷⁶²、⁷⁶³、⁷⁶⁴、⁷⁶⁵、⁷⁶⁶、⁷⁶⁷、⁷⁶⁸、⁷⁶⁹、⁷⁷⁰、⁷⁷¹、⁷⁷²、⁷⁷³、⁷⁷⁴、⁷⁷⁵、⁷⁷⁶、⁷⁷⁷、⁷⁷⁸、⁷⁷⁹、⁷⁸⁰、⁷⁸¹、⁷⁸²、⁷⁸³、⁷⁸⁴、⁷⁸⁵、⁷⁸⁶、⁷⁸⁷、⁷⁸⁸、⁷⁸⁹、⁷⁹⁰、⁷⁹¹、⁷⁹²、⁷⁹³、⁷⁹⁴、⁷⁹⁵、⁷⁹⁶、⁷⁹⁷、⁷⁹⁸、⁷⁹⁹、⁸⁰⁰、⁸⁰¹、⁸⁰²、⁸⁰³、⁸⁰⁴、⁸⁰⁵、⁸⁰⁶、⁸⁰⁷、⁸⁰⁸、⁸⁰⁹、⁸¹⁰、⁸¹¹、⁸¹²、⁸¹³、⁸¹⁴、⁸¹⁵、⁸¹⁶、⁸¹⁷、⁸¹⁸、⁸¹⁹、⁸²⁰、⁸²¹、⁸²²、⁸²³、⁸²⁴、⁸²⁵、⁸²⁶、⁸²⁷、⁸²⁸、⁸²⁹、⁸³⁰、⁸³¹、⁸³²、⁸³³、⁸³⁴、⁸³⁵、⁸³⁶、⁸³⁷、⁸³⁸、⁸³⁹、⁸⁴⁰、⁸⁴¹、⁸⁴²、⁸⁴³、⁸⁴⁴、⁸⁴⁵、⁸⁴⁶、⁸⁴⁷、⁸⁴⁸、⁸⁴⁹、⁸⁵⁰、⁸⁵¹、⁸⁵²、⁸⁵³、⁸⁵⁴、⁸⁵⁵、⁸⁵⁶、⁸⁵⁷、⁸⁵⁸、⁸⁵⁹、⁸⁶⁰、⁸⁶¹、⁸⁶²、⁸⁶³、⁸⁶⁴、⁸⁶⁵、⁸⁶⁶、⁸⁶⁷、⁸⁶⁸、⁸⁶⁹、⁸⁷⁰、⁸⁷¹、⁸⁷²、⁸⁷³、⁸⁷⁴、⁸⁷⁵、⁸⁷⁶、⁸⁷⁷、⁸⁷⁸、⁸⁷⁹、⁸⁸⁰、⁸⁸¹、⁸⁸²、⁸⁸³、⁸⁸⁴、⁸⁸⁵、⁸⁸⁶、⁸⁸⁷、⁸⁸⁸、⁸⁸⁹、⁸⁹⁰、⁸⁹¹、⁸⁹²、⁸⁹³、⁸⁹⁴、⁸⁹⁵、⁸⁹⁶、⁸⁹⁷、⁸⁹⁸、⁸⁹⁹、⁹⁰⁰、⁹⁰¹、⁹⁰²、⁹⁰³、⁹⁰⁴、⁹⁰⁵、⁹⁰⁶、⁹⁰⁷、⁹⁰⁸、⁹⁰⁹、⁹¹⁰、⁹¹¹、⁹¹²、⁹¹³、⁹¹⁴、⁹¹⁵、⁹¹⁶、⁹¹⁷、⁹¹⁸、⁹¹⁹、⁹²⁰、⁹²¹、⁹²²、⁹²³、⁹²⁴、⁹²⁵、⁹²⁶、⁹²⁷、⁹²⁸、⁹²⁹、⁹³⁰、⁹³¹、⁹³²、⁹³³、⁹³⁴、⁹³⁵、⁹³⁶、⁹³⁷、⁹³⁸、⁹³⁹、⁹⁴⁰、⁹⁴¹、⁹⁴²、⁹⁴³、⁹⁴⁴、⁹⁴⁵、⁹⁴⁶、⁹⁴⁷、⁹⁴⁸、⁹⁴⁹、⁹⁵⁰、⁹⁵¹、⁹⁵²、⁹⁵³、⁹⁵⁴、⁹⁵⁵、⁹⁵⁶、⁹⁵⁷、⁹⁵⁸、⁹⁵⁹、⁹⁶⁰、⁹⁶¹、⁹⁶²、⁹⁶³、⁹⁶⁴、⁹⁶⁵、⁹⁶⁶、⁹⁶⁷、⁹⁶⁸、⁹⁶⁹、⁹⁷⁰、⁹⁷¹、⁹⁷²、⁹⁷³、⁹⁷⁴、⁹⁷⁵、⁹⁷⁶、⁹⁷⁷、⁹⁷⁸、⁹⁷⁹、⁹⁸⁰、⁹⁸¹、⁹⁸²、⁹⁸³、⁹⁸⁴、⁹⁸⁵、⁹⁸⁶、⁹⁸⁷、⁹⁸⁸、⁹⁸⁹、⁹⁹⁰、⁹⁹¹、⁹⁹²、⁹⁹³、⁹⁹⁴、⁹⁹⁵、⁹⁹⁶、⁹⁹⁷、⁹⁹⁸、⁹⁹⁹、¹⁰⁰⁰、¹⁰⁰¹、¹⁰⁰²、¹⁰⁰³、¹⁰⁰⁴、¹⁰⁰⁵、¹⁰⁰⁶、¹⁰⁰⁷、¹⁰⁰⁸、¹⁰⁰⁹、¹⁰¹⁰、¹⁰¹¹、¹⁰¹²、¹⁰¹³、¹⁰¹⁴、¹⁰¹⁵、¹⁰¹⁶、¹⁰¹⁷、¹⁰¹⁸、¹⁰¹⁹、¹⁰²⁰、¹⁰²¹、¹⁰²²、¹⁰²³、¹⁰²⁴、¹⁰²⁵、¹⁰²⁶、¹⁰²⁷、¹⁰²⁸、¹⁰²⁹、¹⁰³⁰、¹⁰³¹、¹⁰³²、¹⁰³³、¹⁰³⁴、¹⁰³⁵、¹⁰³⁶、¹⁰³⁷、¹⁰³⁸、¹⁰³⁹、¹⁰⁴⁰、¹⁰⁴¹、¹⁰⁴²、¹⁰⁴³、¹⁰⁴⁴、¹⁰⁴⁵、¹⁰⁴⁶、¹⁰⁴⁷、¹⁰⁴⁸、¹⁰⁴⁹、¹⁰⁵⁰、¹⁰⁵¹、¹⁰⁵²、¹⁰⁵³、¹⁰⁵⁴、¹⁰⁵⁵、¹⁰⁵⁶、¹⁰⁵⁷、¹⁰⁵⁸、¹⁰⁵⁹、¹⁰⁶⁰、¹⁰⁶¹、¹⁰⁶²、¹⁰⁶³、¹⁰⁶⁴、¹⁰⁶⁵、¹⁰⁶⁶、¹⁰⁶⁷、¹⁰⁶⁸、¹⁰⁶⁹、¹⁰⁷⁰、¹⁰⁷¹、¹⁰⁷²、¹⁰⁷³、¹⁰⁷⁴、¹⁰⁷⁵、¹⁰⁷⁶、¹⁰⁷⁷、¹⁰⁷⁸、¹⁰⁷⁹、¹⁰⁸⁰、¹⁰⁸¹、¹⁰⁸²、¹⁰⁸³、¹⁰⁸⁴、¹⁰⁸⁵、¹⁰⁸⁶、¹⁰⁸⁷、¹⁰⁸⁸、¹⁰⁸⁹、¹⁰⁹⁰、¹⁰⁹¹、¹⁰⁹²、¹⁰⁹³、¹⁰⁹⁴、¹⁰⁹⁵、¹⁰⁹⁶、¹⁰⁹⁷、¹⁰⁹⁸、¹⁰⁹⁹、¹¹⁰⁰、¹¹⁰¹、¹¹⁰²、¹¹⁰³、¹¹⁰⁴、¹¹⁰⁵、¹¹⁰⁶、¹¹⁰⁷、¹¹⁰⁸、¹¹⁰⁹、¹¹¹⁰、¹¹¹¹、¹¹¹²、¹¹¹³、¹¹¹⁴、¹¹¹⁵、¹¹¹⁶、¹¹¹⁷、¹¹¹⁸、¹¹¹⁹、¹¹²⁰、¹¹²¹、¹¹²²、¹¹²³、¹¹²⁴、¹¹²⁵、¹¹²⁶、¹¹²⁷、¹¹²⁸、¹¹²⁹、¹¹³⁰、¹¹³¹、¹¹³²、¹¹³³、¹¹³⁴、¹¹³⁵、¹¹³⁶、¹¹³⁷、¹¹³⁸、¹¹³⁹、¹¹⁴⁰、¹¹⁴¹、¹¹⁴²、¹¹⁴³、¹¹⁴⁴、¹¹⁴⁵、¹¹⁴⁶、¹¹⁴⁷、¹¹⁴⁸、¹¹⁴⁹、¹¹⁵⁰、¹¹⁵¹、¹¹⁵²、¹¹⁵³、¹¹⁵⁴、¹¹⁵⁵、¹¹⁵⁶、¹¹⁵⁷、¹¹⁵⁸、¹¹⁵⁹、¹¹⁶⁰、¹¹⁶¹、¹¹⁶²、¹¹⁶³、¹¹⁶⁴、¹¹⁶⁵、¹¹⁶⁶、¹¹⁶⁷、¹¹⁶⁸、¹¹⁶⁹、¹¹⁷⁰、¹¹⁷¹、¹¹⁷²、¹¹⁷³、¹¹⁷⁴、¹¹⁷⁵、¹¹⁷⁶、¹¹⁷⁷、¹¹⁷⁸、¹¹⁷⁹、¹¹⁸⁰、¹¹⁸¹、¹¹⁸²、¹¹⁸³、¹¹⁸⁴、¹¹⁸⁵、¹¹⁸⁶、¹¹⁸⁷、¹¹⁸⁸、¹¹⁸⁹、¹¹⁹⁰、¹¹⁹¹、¹¹⁹²、¹¹⁹³、¹¹⁹⁴、¹¹⁹⁵、¹¹⁹⁶、¹¹⁹

べてのもの、世界であろうし、世界は論理的世界として同時に実在的世界であり、しかも実在的世界として同時に論理的世界である。

(1)これについて『神話の哲学』『第二巻』一三〇頁を参照せよ。編纂者。

ところが、〈約束され、可能なものとして神に示された過程〉が自らを結びつける点は、〈あの予め見られなかつたが、ex improviso「思いがけなく」可能なものとして現れ出た存在〉の中にのみある。この存在は、その本性からして、偶然的なものとしてのみ現象しうるにすぎないが、それが現れ出る際、前思惟的存在を〈つねに存在していたし、すでに現存在するもの〉として自分の前に見出す(ここでは現存在という言葉はその本来の意味で使われている)。しかしまた、あらかじめすでに、神は、あの可能性によって、〈前思惟的存在を越えて存在しうること〉における自分に気づくだけでなく、まさにそのことで同時に、自らの前思惟的存在に気づく。その結果、神は両者の真ん中で、しかも両者から自由な第三のものと自らを考へる。〈存在から自由でありうること〉によって、この第三のものは自らポテンツであり、〈自らしうることとselbst=Können〉であり、その限りで、純粹な主体である。〈しうることから自由であること〉によって、この第三のものは、その限りで、しうることに對して自ら存在することであり、自ら客体である。それゆえ、第三のものは、ある同一のものにおける主体と客体であり、それゆえ、そもそも分離できない主体と客体、つまり〈分離できない自分自身にとって対象的なものであり、自分自身を所有しているものであつて、必然的に自分のもとに留

まるもの〉、もはや主体だけでも客体だけでもありえないもの、主体と客体でなければならぬものであつて、それゆえ、精神である。このものは三つの契機 Momente であり、これらの契機から、神の直観あるいは神の計画において直接あらゆる実存の原型が構成される。それは、この原型がすでに消極的哲学の根底におかれたようにである。というのは、実存するものすべての始まり、つまり、自分自身の中で実存するものすべての始まりは存在への単なる主体であり、この主体が自らまだ存在しない限りで存在しうるものにすぎない。しかし存在への単なる主体は、まだ存在がなく、したがつて、単なるポテンツとして、単なるしうることとして考えられうる。このものがあらゆる実存することの内的な始まり——とつかかりAn-fang——である。なぜならば、主体は、まさに自らの無限な非存在によって、まったく同様な無限な存在を引きつけるポテンツであるからである。無限な存在は、それゆえ第二のものであり、第二のものにすぎない。始めることと引きつけることは、すでに言葉からして、同じ意義の概念である。引きつけることに始まりがある。あの potentia ultima「最後のポテンツ」——その無限な否定性によって、あの最後のポテンツはまったく同様な無限な存在を引きつけるポテンツである。この無限な存在は、それゆえ第二のものであり、しかもこのポテンツと一緒にで初めて〈存在するもの〉であるが、〈なお分離しうる存在するもの〉である。それは、存在の主体であるものがこの存在から離反し、自分だけでも〈存在するもの〉になりうることによってである。その規定からすると、無限な存在に對して内に向けられている、この存在にとっての主体は、その限りで、〈一時的でない

第三のもののつまり分離しえない主体＝客体が閉め出され否定されるのは不可避のことである。しかしながら、このことで、あらゆる実存することの三つの要素Elementeは、絶対的には分離しない。というのは、まさに神は三要素の中で、相互の緊張と閉め出しにおいて三要素をまとめている排除しえない一なるものであるからである。しかし、このことで三要素の間には矛盾が存在するし、矛盾でもって必然的過程が定立され、この過程によって、純粋な主体しかも純粋な主体として統一全体の担い手であるべきものが、再び主体へ、純粋なしうることへ克服され、そして神がfinaliter「最終的に」ひとり欲しうる（実存するもの）のあの原像が実現される。けれども、現実化された原像と、神の意志によって最初に定立された緊張との間には、私たちがすでに消極的哲学において可能なものとして予見した（過程の時機というもののすべて）が存在しているが、これらの時機は、「こゝ『積極的哲学』では必然的過程の諸時機として繰り返される。

本論文には著作年代が記されていないが、編纂者であるK・F・A・シェリング(息子)による「編纂者の序言」一〇頁では「シェリングがこの論文をベルリンでの第一講において利用したがゆえに」、「啓示の哲学」への付録として伝えられている」と述べられている。またこの論文について、「啓示の哲学」第一(三巻)二四八頁から二四九頁にかけての編纂者註において、「一八四一年から一八四二年にかけての冬学期にベルリンでなされた啓示の哲学に関する講義において、

適用された別の叙述「本論文のこと」が存在する *existit*、と記されている。これらからすると、本論文は一八四一年には存在していたことが確かめられるが、著作年が一八四一年であると言うことはできない。Subkamp 版シェリング著作集第五巻では、一八三九年のミュンヘン講義に基づくものと推定されている。けれども、その根拠は同書には書かれていない。したがって、本論文の著作年代は一応、遅くとも一八四一年には成立していたものとしておく。

訳者の能力並びに本邦初訳故の誤りを出来る限り少なくするために、忌憚のないご批評ご指摘をお願いいたします。(19) 以前については弘前大学人文学部紀要第一九号を参照されたい。

なお「」のなかはすべて訳者の補いであり、〈〉は文章を明確にするために訳者が適宜付け加えたものである。欄外の数字は原文のおよそのページ数である。